

## (2) 小麦は乾燥地を好む？－北海道は不適地？－

日本の小麦生産地は、現在では、北海道が全生産量の半分以上を占め、栽培面積でも9～10万ha（平成元年には12万9,700ha）と、北海道の畑作物の中でも、てんさいの7万haを上回って、第1位の作付面積を誇っています。ですから小麦は、北海道に適応した作物と見られています。

しかし、小麦は収穫時期に雨が降りますと、穂発芽し易く、品質低下となり、小麦本来のめんやパン用途に適応しないため、醸造用や家畜の飼料になったりします。しかも農家の皆さんは、減収により所得に大きく影響し、実需の皆さんには、安定生産にならないため、安心して使用できない訳です。最近20年間の作況指数を表に示しましたが、これをみても不安定さがご理解いただけるでしょう。この主要因は登熟～収穫期の降雨なのです。

世界的に小麦の生産地をみますと、米国、カナダ、オーストラリア、アルゼンチンなど雨量が少なく、日照が多い国で栽培されています。とくに収穫期には降雨がほとんどなく、日本のように雨ぬれで、穂発芽等による品質低下が少ないのです。穂発芽が全くないわけではありませんが、まれにある程度で、日本のように毎年どこかで品質低下となっているのとは、大きな違いです。例えば、日本のうどん用に最も多く輸入されているオーストラリア産のASWの生産地は、主に西オーストラリア州で生産されています。この地域は年間雨量が200～400mmで、北海道で雨量が最も少ない網走管内の半分以下です。とくに収穫期は、2～3カ月間降雨がないのです。また、米国の小麦栽培主産地は、テレビ等でご覧になった方も多いと思いますが、降水量が少ないために、かなりの地域で地下水による畑地灌漑によって栽培し、収穫時期は降水量が極めて少ないのです。

最近20年間の小麦作況

作況指数	全 国	北海道
110以上	2	5
～109	4	3
～103	7	3
～96	3	4
90以下	4	5

そのほか、カナダ、アルゼンチンをはじめ、小麦の原産地である中近東でも同様です。その点、日本はモンスーン地帯で、<sup>みずは</sup>瑞穂の国ともいわれるように

雨が多く、水稲にはよくマッチした気象ですが、小麦には不適といえるでしょう。

北海道の7～8月は、日照時間が少なく、降水量が多いのが特徴で、とくに収穫期となる7月下旬から8月上・中旬は、その傾向が強いのです。現在、主産地となっている十勝と網走では、とくに十勝が7月下旬～8月にかけて降雨が多く、雨ぬれによる品質低下が著しいのです。したがって、収穫や乾燥を迅速に行って、品質低下を防ぐため、コンバイン台数や乾燥施設に大きな投資をしています。それでも降雨が3～4日連続しますと、醸造用や家畜の飼料としかならない規格外小麦となってしまいます。

このように北海道畑作で、作付第1位の小麦であります。世界的な適地適作の理論からしますと、必ずしも北海道に適した作物とはいえないのです。施設投資と栽培管理技術でカバーしながらの小麦生産で、稲作からみると苦勞の多い作物といえるでしょう。

<佐藤 久泰>